
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 36

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 701. トレンド除去変動解析とフラクタル解析
- 702. データが語る物語と喧嘩の意義
- 703. 書物との出会いを大切にすること
- 704. 経験の中と原点回帰
- 705. 実証的教育学とMOOC
- 706. アブラハムのように:内側からの促しとそこからの出発
- 707. 絵画的・音楽的に生きること
- 708. 最終試験に向けての雑記
- 709. 大河の一滴を求めて
- 710. 言語の深化
- 711. 眼と意識の発達からの無境界
- 712. 久々の手書き試験
- 713. 来学期に向けて
- 714. フローニンゲン大学へのコンサルティングサービス
- 715. 新たな場所へ
- 716. 連弾による懐古と教示
- 717. 収まらぬ余震
- 718. 論文執筆と日記について
- 719. ベートーヴェン ピアノソナタ第26番『告別』より
- 720. 底なしの明るさの中で生きることと研究の進展

701. トレンド除去変動解析とフラクタル解析

昨日は、夕方から就寝前にかけて、「複雑性と人間発達」で取り上げた実習内容を再度もう一度自分の手で行っていた。実習の中で取り上げられた、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法のうち、いつかはエクセルで行えてしまうものもある。また、実際のクラスではMATLABという数値解析用のプログラミング言語を用いて分析作業をすることもあった。ただし、私はMATLABという言葉に慣れていないため、文字通り、新しい言語を学ぶ感覚でそれと接していた。

昨日、再度自分の手で実習内容を振り返るためにMATLABを開いてみたが、やはり分析がなかなかうまくいかなかった。そのため、クラスで取り上げた分析手法のほとんど全てがプログラミング言語のRで行えるということを聞いていたこともあり、Rで分析を行うことにした。もちろん、Rという言葉に関してもそれほど習熟しているわけではなく、依然として初心者の域を出ないが、MATLABを用いるよりも、自分にとっては分析を進めやすい。昨日、特に私が力を入れて取り組んでいた解析手法は、「トレンド除去変動解析 (Detrended Fluctuation Analysis)」と「フラクタル解析」と呼ばれるものである。

どちらも共に、非線形な動きを示すデータに対して適用可能なものであり、データに潜むフラクタル尺度を分析することに有益である。特に前者に関して、参考になるコードをネット上で検索し、それを元に、あれこれ自分で数字やコードを変えてみることに熱中していた。

本日も引き続き、昨日の分析作業の中でうまくいかなかった箇所にも再度取り組んでいきたいと思う。また今日は、「交差再帰定量化解析 (Cross Recurrence Quantification Analysis)」という、二つの非線形時系列データの依存度合い、つまり、シンクロナイゼーションの度合いを分析できる興味深い手法について実習を行おうと思う。そして、最後のクラスで取り上げた「モンテカルロ解析」についても、再度自分の手を動かしながら、分析の手順とその意味を丁寧に確認していきたい。こちらは、エクセル上で分析ができてしまうので、比較的楽に作業を行うことができる。

いずれにせよ、今回のコースで学習した数々の分析手法は、どれも今後の自分の研究や実務に不可欠のものであるため、何よりも自分の手を動かしながら、分析の手順と意味を身体に染み込ませていくことが必要である。実際に自分の手を動かしながら、繰り返しこれらの手法に触れることによって、徐々に分析作業もスムーズになり、さらには、それらの手法に関する理解が少しずつ深まって

いくのが分かる。そうした理解の深まりと共に、徐々に周辺知識が拡張していく様子も同時に見て取ることができる。

やはり学習の髄には、熱中の最中で自分の手と頭を動かすことが重要であり、探究心に包まれた中で周辺項目について自主的に調べていくことが重要なのだろう。2017/1/30

702. データが語る物語と喧嘩の意義

今日の昼食中にふと、大人になってからというもの、人と喧嘩をすることがめっきり減ったものだと思う。一方、自分は何かと喧嘩をすることの必要性を最近強く感じている。ここで述べている喧嘩とは、もちろん、身体のおつかり合いのような次元のものも当然含まれるが、私が最近必要だと思っているのは、そうした次元での喧嘩ではない。考えや行動方針に関する対峙や対立の必要性である。

喧嘩というのは、それが身体次元であれ、思考次元であれ、強烈な感情を常に伴う。往々にして、喧嘩の最中は我を忘れることが多いほどに、そこでは強力なエネルギーが生じている。そして、最も私が興味深く思うのは、喧嘩後のあの清々しい爽快感である。当然ながら、喧嘩の終わり方にもよるが、私がこれまで経験してきた喧嘩はどれも、大きなエネルギーの衝突と解放がもたらす和解がそこにあったような気がする。

他者と和解を結ぶ瞬間のあの感覚。少しばかりの恥じらいが混じりながらも、衝突から新しい次元に関係性が高められたかのような清々しさが、自分の過去の喧嘩にはあったように思う。そのようなことを考えていると、喧嘩にはどこか、他者との関係性をさらに深める重要な意義を持っている気がしてならないのだ。今の私は、特定の他者ではなく、集合的な思想や風潮と対峙・対決するような必要性を感じていることに気づいた。

これは非常に大事なことである。これは私と集合的な思想や風潮との和解を目指したものではなく、真正面からの衝突により、お互いが次の次元に到達するために必要なものなのである。もしかすると、相互発達とは二つの存在間の生やさしい関係から生じるようなものではなく、大きな対決から生じるものなのではないだろうか。そのようなことを考える小さなきっかけになったのは、昨日何気なく眺めていた研究データだった。

昨日は、「状態空間分析 (state space analysis)」と言う、ダイナミックシステムアプローチの一つの研究手法を扱うソフトウェアをあれこれといじっていた。この手法は、「複雑性と人間発達」というコースで取り上げられたものであり、その時に、分析に使うための研究データも担当教授から提供されていた。そのデータを簡単に述べると、10組の親子が数週間にわたって行った対話が、感情パターンによって分類され、それが時系列になったものである。

具体的には、怒り、苛立ち、ニュートラル、愛情というように合計で7つの感情パターンによって、親子の対話が時系列に並べられた形式を持ったデータである。状態空間というのは、親の感情パターンを縦軸に取り、子供の感情パターンを横軸に取った二次元空間のことを指す。厳密には、多次元な状態空間を構築することも可能だが、基本的には二次元のものが最も多い。

私が眺めていたのは、二次元の状態空間内で、時の経過に応じて親子が繰り広げる感情パターンの動的な変化のプロセスであった。そのプロセスを丹念に追っていると、データがもはや単なる記号ではなく、物語を語るものにしか思えなかったのである。例えば、こんな物語が垣間見えた。

子供が苛立ちの感情パターンを示し、それに対して親はニュートラルに振る舞い、子供がそれでもまだ苛立ちを抱えているので、親がニュートラルから苛立ちを通り越して怒りの感情を示し、その後、子供が怒りの感情を示すというものだ。だが、こうした怒りの感情のぶつかり合いの先に待っているのはたいてい、和解や愛情という感情だったことがとても面白い。データが静かに語りかける物語から、さらに想像力を膨らませると、対立最中のエネルギーの衝突の様子や、和解後の爽快感を親子が感じ、そこから愛情を深めていく様子が見て取れたのだ。

このような何気ない実証データからも、衝突することの意義を実感し、衝突して初めて、新たな次元での関係性が結ばれるきっかけが生まれうるのではないかと思ったのである。冒頭で述べたように、広義の意味で他者と対峙をしなくなっていたのは、そもそも自分の中に芯のようなものや守るべきものがなかったからではないかと思わされた。

しかし、今の私に対立や対決に乗り出そうとしているということは、ようやく芯や守るべきものを自分の中に見出したことと深い関係があるだろう。そして何より、集合的なものとの対決には、自分の言

葉がなければ話にならない。集合的なものとの対決に乗り出す時期に来たと実感しているのは、自分の言葉を私が少しずつ発見しつつあることと大いに関係しているだろう。2017/1/30

【追記】

対決そのものとその後の和解には、どこか治癒的な作用を見て取ることができる。この日記を書いてからすでに一年以上の月日が経ち、今私は何かと対決しているのかを改めて自己に問い直した。とりわけここ最近の私がこの世界への関与を強く意識し始めたのは、もしかするとこの世界を真に直視し、それと対峙し始めたからなのかもしれない。ただし、今はまだこの世界の病理的側面と真に対決をしていないようにも思える。ここから世界と私との関係性はどのようになるのだろうか。そのようなことを考えさせてくれる日記であった。フローニンゲン:2018/4/13(金)07:29

703. 書物との出会いを大切にすること

昨日は、「複雑性と人間発達」の最終試験に向けて複数の文献を読み込んでいた。文献というのは繰り返し読めば読むほど理解が深まり、知識の体系が徐々に分厚くなっていくということを改めて実感した。

最終試験への準備がひと段落したところで、今回のコースの内容をさらに深掘りしていくために、コースで取り扱ったもの以外で優れた論文や専門書籍はないか検索していた。当然ながら、そうした文献は探せば探すほど、山ほど出てくるわけであり、昨日も思わぬ掘り出し物を探し当てることができた。論文に関しては、フローニンゲン大学のオンラインジャーナルを活用して何本かダウンロードし、専門書に関しては合計四冊ほどを、イギリスとドイツのアマゾンに注文することにした。以前紹介したように、私は重要な論文や書籍は必ず紙媒体で所有するようにしている。

PDFの形式では、五感から情報を取り入れる密度がどうしても希薄になり、知識体系の確固とした土台を作ることに不適切だと思っている。そして昨夜、つくづく重要な論文や書籍は手元に持っておくことが大事だと実感することがあった。

「複雑性と人間発達」のコースは、複雑性科学の領域に属するダイナミックシステムアプローチや応用数学の非線形ダイナミクスを正面から取り扱うものである。このコースの最中、課題図書以外に私がいつも参考にしていたのは、“Nonlinear Dynamical Systems Analysis for the Behavioral Sciences

Using Read Data (2011)”という専門書であった。この専門書には、クラスで取り上げた数式の背景や数学的な概念の理論的な説明、さらには、クラスで学習した数々の研究手法のより詳しい説明が記載されている。クラスの進行に合わせて、私は何度この専門書のページをめくっただろうか。

それぐらい、この専門書は非線形ダイナミクスの解析手法の説明が充実していると言える。そこでふと、そもそもこの専門書は今回のコースの課題図書や参考図書ではないのに、どうして今私の手元にあるのかを考えていた。すると、そういえばこの専門書は、私が昨年日本にいた時に米国から取り寄せたものであることを思い出したのだ。おそらく、東京で生活を始めてすぐに購入したものだと思うのだが、当時はこの専門書を開くことなどほとんどなかったように思う。

だが、当時の私は、それでもこの専門書は今後の自分の研究や実務に重要であるに違いないという確信があったのだ。それゆえに、この書籍を購入していたのだと思う。購入から一年経ち、当時の直感が正しかったことを示すかのように、現在の私は、この専門書にとってもお世話になっている。やはり、自分が少しでも参考になると思う専門書は購入し、手元に所持しておくことが大事だということに改めて実感した。

いついかなる時にその書籍が必要となるかわからないが、必要となる時に書籍の形としてそれが本棚に眠っている姿を見ると、安堵した気持ちになったことがある人も多いのではないだろうか。私は自分の本棚を眺める時はいつも、そのような不思議な安堵感を覚えるのである。書物との出会いを大切にするとするのは、実物の書物を本棚に置き、その書物を必要とする時に、感謝の気持ちを持ちながらその書物のページを開くことなのではないかと思う。2017/1/31

【追記】

この日記を読みながら、昨日の最終試験で出題された設問のことを思い出した。この日記に書かれているように、実物の書物を手にとって、その香りや手触りなどをもとに学習を進めていくことの大きな意義を改めて感じる。これはまさに、「体現的学習 (embodied learning)」と呼ばれるものだろう。

私たちは自分の身体を通して様々な情報を得ている。ある一冊の書物と向き合うときにも、身体を通じて学習することがいかに大切かを改めて思う。もちろん、近年はヴァーチャルリアリティ上での

学習に関する研究も進み、ヴァーチャル空間でも私たちは身体感覚を通じて学習することが可能であることが分かっている。これはとても興味深い発見事項である。

この物理世界での学習に関しては、私たちの身体をいかに活用して学習を進めていくかが依然として重要であるように思う。確かに現在の私は大量の論文を読むことが要求される環境にいるため、全ての論文を紙媒体で所有することができなくなっている。だが、重要な論文は今でも印刷をするようにしている。それはなぜなら、上記で述べた通り、紙を触って自分の手でページをめくることによる意義、紙の香りや紙をめくる音から得られる学習効果というものがあるように思えるからである

学習を行う際には、とにかく身体を通じた体現された学びを絶えず意識するようにしたい。そうして獲得された知見は、自分の肚から生まれる体現化された言葉として形になっていこう。フローニンゲン:2018/4/13(金)07:45

704. 経験の中と原点回帰

自己の形成にせよ、知識体系の構築にせよ、そこには不断の繰り返しがやはり必要だと思った。毎日、日々の出来事を振り返り、そこから自分の中で新たな気づきを獲得し、自己の内側で種々の体系を構築することを強く意識し始めるようになってからしばらくの時が経つ。

森有正先生が指摘するように、経験の中にある出会いと経験の中における確認、そして、そこから新しい事実を発見していくサイクルは、自己にせよ知識体系にせよ技術体系にせよ、私たちの内側で様々な体系を構築していく際に極めて重要であると改めて思った。

とかく私たちは、出会いというものを外側にある対象との接触と誤ってしまったり、外側の基準と照らし合わせて自分の思考や感覚を確認することだけに留まってしまったりする傾向にある。そのようなことをしては、真に経験が深まることはなく、内側の成熟が進展していかないのだと思うのだ。

出会いというのは、仮に外側の対象がきっかけになったとしても、内側に起こるものであり、それを内側の経験の中で捉えていくことが大切である。さらに、自分の思考や感覚を外側の基準と照らし合わせて確認するのではなく、自らの経験を通じて確認していくということは、いかに大切なことだ

ろうか。自分の内側で真の発見を得るためには、このように、経験の中で出会い、経験の中で確認していくという不断の実践が不可欠なのだろう。

昨日の散歩中、原点回帰と新たな領域の深耕を同時に行っていきたい、という思いが突発的に生じた。ここ最近の自分を振り返り、複雑性科学に関する探究—ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス—が、日々の探究活動のほとんどを占めており、純粋に発達心理学を探究しているという感覚はほとんどないことに気づく。

確かに、もはや人間の発達を研究する際に、そして発達支援の実務を行う際に、既存の発達心理学の枠組みだけでは不十分なのだ。そのため、複雑性科学の探究を現在進めていることは納得いくものだと言える。また、大きな括りでいえば、複雑性科学に立脚した探究も、人間発達に関わる探究をしていることに変わりはないだろう。しかしながら、昨日ふと、発達心理学の古典的なテキストをじっくりと読み返したいという思いが突如として湧き上がってきたのである。

今はそのような時間的余裕がないため、近い将来、純粋に発達心理学の古典的なテキストに再度目を通したいと思う。現在の私の研究や実務の出発点となった領域は、やはり発達心理学であるため、こうした原点回帰を行うことは、どこかのプロセスで不可避に生じるものなのだろう。

こうした原点回帰の思いを胸に持ちながら、ダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスに関する知識体系をさらに高度なものにしていく修練を続けたいと思う。いつか世界のどこかの大学院で、発達心理学の理論的な講義と、ダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスの研究手法に関する講義を受け持ちたいという思いがふつふつ湧き上がる。その日に向かって今日も歩きたい。2017/1/31

【追記】

発達心理学の古典的なテキストを網羅的に読み返したいという思いは、今も強く自分の内側にある。結局この一年間は、それほど発達心理学のテキストに目を通すことはなかった。昨年に引き続き、複雑性科学、システム科学、ネットワーク科学、そして現在所属しているプログラムが対象としている実証的教育学に関する探究をこの一年間前に進めていた。そうしたことから、純粋に発達心理学のテキストを読む時間的な余裕がなかった。

しかし、数週間前から再び発達心理学の専門書や論文を本棚から取り出し、少しずつ読み返すことを行っている自分が現れた。それはもしかすると、この日記で指摘されているように、再び原点に回帰し、そこから新たな出発をする時期に差し掛かっていることを示しているのかもしれない。本当に何か新しい出発が始まりそうな予感がしている。

フローニンゲン中央駅から出発した列車がスキポール空港に向かって進んでいる。今私はポーランドのワルシャワに向かっている。これも新たな出発に向けた一歩であり、その先にある新たな出発が少しずつ私に近づいているのが分かる。フローニンゲン:2018/4/13(金)07:54

705. 実証的教育学とMOOC

フローニンゲン大学での二年目の生活について、少しばかり進展があった。二年目の生活において、どのプログラムに在籍しながら自分の研究を進めていくかに関して、二つの選択肢で揺れていたことを以前言及したように思う。具体的には、「産業組織心理学」のプログラムに在籍しながら、ネットワーク科学の理論と研究手法を学びつつ、これまで学んできたダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスの研究手法を用いながら、成長支援コーチングに関する実証研究を行うというのが一つの選択肢であった。

二つ目の選択肢は、「実証的教育学」のプログラムに在籍し、学習理論や実証的教育研究手法を学びながら、成人のオンライン学習やオンライントレーニングに関する研究を行うというものである。どちらの道に進むにせよ、企業人向けの成長支援コーチングの実証研究と、成人向けのオンライン学習の実証研究には今後も従事していきたいと考えている。

一週間前に、実証的教育学のプログラム長に連絡をしており、昨日、その返信があった。プログラム長はチリ人の女性であり、どうやら先日までチリにいたそうである。彼女からの返信を見ると、このプログラムは自分の関心に合致しており、学習理論や教育心理学、そしてオンライン学習理論に関するコースを履修しながら、自分の研究を進めていくことができるということがわかった。

特にフローニンゲン大学は、“FutureLearn”を通じて、インターネット上で誰もが受講できる無料のオンライン講義を提供している。こうした講義は近年特に注目を集めており、“MOOC (Massive Open Online Course: ムーク)”と呼ばれている。私も以前、フローニンゲン大学が提供するオランダ

語のMOOCを履修していたことがあり、MOOCによる成人学習に着目をしていた。また、この五年間ほど、発達理論を中心とした講座をオンラインで提供していたこともあり、どのようにすれば成人がオンラインを通じてより学びを深められるのかについて、実証的な研究をさらに行っていきたくて思っていたのである。

今の研究テーマもまさにそれであり、実証的教育学のプログラムに在籍することによって、また新しい観点と手法を通じて、成人のオンライン学習について研究を行っていきたくて思う。より詳しく調べてみると、ネットワーク科学の理論と研究手法を学ぶコースを履修しながら、実証的教育学のプログラムを進めていく道がありそうということが分かった。フローニンゲン大学での一年目の研究生活では、とにかく発達現象をダイナミックシステム理論の観点から探究することに集中していた。

そして、二年目では、その関心を引き継ぎながらも、発達現象をダイナミックネットワーク理論の観点から探究したいと考えていたのである。ネットワーク科学の理解を深めながら、実証的教育学の探究が行えるということを踏まえると、現段階では、産業組織心理学のプログラムではなく、こちらのプログラムに進みたいと思う。2017/1/31

【追記】

実際に私はこの実証的教育学のプログラムに所属することになった。今から一年以上前に上記のようなことを考えていたのだと改めて知る。このプログラムに所属することができて、本当に幸運であったと改めて思う。これまでにはない観点と手法で自分の研究と実務を進めることができるようになったことは、このプログラムに所属したことの大きな恩恵であった。成長支援のプログラムやトレーニングの効果をいかに測定するかということに関して、その効果測定のデザインから実際の測定に至るまでの一連の流れをより深く理解することができたように思う。

また、そうした概念的な理解を超えて、実際にプログラムの効果測定を行うようなプロジェクトに参画することによって、経験を通じた理解が深まっているのを感じる。もちろん、実証的教育学のプログラムに在籍する学生が私だけになるとは思ってもみなかったが、教育学科の他のプログラムの学生とも親交を結ぶことができ、この一年間は学びの濃い時間を過ごすことができた。

ここで書かれているように、今の私はMOOCに関する研究を進め、ここからはオンライン学習の研究を進めながらもまた異なる領域の研究を進めていこうと思っている。それは作曲技術の発達に関する研究であり、その研究に着手する日がやってくる日を心待ちにしている。

過去の日記を読み返して驚かされるのは、文章として書いていたことが徐々に本当に実現されていくということである。実証的教育学のプログラムに入学したこともそうであり、MOOCに関する研究に着手したこともそうである。自分の言葉で自分の思念を具現化させていくことにはやはり超越的な力があるように思えてくる。であるとするならば、作曲技術の発達を研究する日も近いうちにやってくるのではないだろうか。その日がやってくることを心の底から楽しみにしている。フローニンゲン:2018/4/13(金)08:08

706. アブラハムのように:内側からの促しとそこからの出発

そもそも今の私は、なぜ成人発達の研究と実践に強く関心を持っているのかを考えていた。確かに、米国在住時代の後半の私は、子供たちの教育に携わっていたこともあり、成人期前の発達にも大きな関心を寄せていた。しかし、今の主要な関心事項は、再び成人発達と成人教育に戻っている。これまで成人発達に関する探究と実務に携わっている中で、正直なところ、成人の発達の大部分は、やはり幼少期に決定付けられるということをも身を持って実感している。

成人期以降の発達を育てていく種のようなものがあるとすれば、その種は遅くとも12歳までの経験によって形作られるのではないか、と思っている。これは私の直感のみならず、ルドルフ・シュタイナーをはじめとした、発達理論に精通した幾人もの教育思想家の発想と同じである。そう考えると、幼少期の教育は、一生涯にわたる発達においてなおさら重要なものに映る。その重要性を強調してもしすぎることはないだろう。だが、それでも私が成人期以降の発達に現在特に関心を持っているのには、一つの重大な理由がありそうだとすることにふと気づいた。

私はキリスト教について全く造詣が深くないが、森有正先生の書物を読んでいて、アブラハムの生き様の中に、一生涯にわたる発達の鍵を見出したような感覚に包まれた。森先生の書物を読んで初めて知ったのであるが、アブラハムはある時、啓示的な伝言を受け取り、自分の内心の深い促しに応じて、人生の新たな出発を果たしたそうである。つまり、アブラハムは、自分の内側の最も深い

部分から湧き上がる声に衝き動かされ、ハランの地からカナンに向けて出発をしたのである。この時、アブラハムは75歳だったそうだ。

このエピソードを読んだ時、私たちの人格を一生涯にわたって深めていく際には、アブラハムのように、良心の叫びにも似た内側の促しに気づき、それに純粋に従って行動を起こしていくことが非常に大切なのではないかと思ったのだ。成人期以降、こうした内側の深い部分から湧き上がる抑えがたい感覚を得るといって自体が稀であろうし、その感覚に気づき、その導きに身を委ねて行動をなすということも非常に稀だろう。

そうした内側からの促しที่流れる道のようなものは、幼少期に形成されるてしまうものだろうし、そうした促しに気づける感性というも、幼少期に形成されてしまうのだと思うのだ。また、内側からの促しที่流れる道やそれに気づける感性は、幼少期以降、年齢と共にますます閉じられてしまうのだと思う。だが、それらの道や感性が、一生涯にわたる人格の成熟の鍵をなすがゆえに、それらの道や感性を取り戻す手段はないのかと私は思ってしまうのだ。残念ながら、そうした手段を発見する望みは、今のところほとんどない。

それにもかかわらず、その手段のきっかけを掴もうとするかのごとく、私は成人以降の発達研究と向き合っているのだと知った。私たちが、固有の内側の促しに気づくためには何が必要なのだろうか。また、仮に促しを阻害するものがあるとすれば、それは一体何であり、そうした阻害をどのように私たちは乗り越えていくことができるのか。これらの問いは、今の私にとって大変重要なものである。成人以降の発達において重要なのは、何よりも、自己に固有の内側からの促しに気づき、促しの声に応じながら行動をなしていくことだろう。その先に、人格の成熟と小さな自己からの脱却があるのだと思わずにはいられない。

アブラハムのように生きるためには、幼少期以降に閉じられたものを再度開くような試みが不可欠である。私の究極的な関心事項の一つは、そうした試みの具体的な形を見つけていくことにあるのだと思う。2017/1/31

【追記】

内側からの深い促しに応じて生きること。それは今も私が大切にしている生き方であり、それが日々の行動原理となっている。フローニンゲンからスキポール空港に近づくにつれて、朝日の輝きが増し始めている。上記の日記の中で私は、発達の大部分は幼少期に決定されてしまうと述べている。おそらく、その主張は多くの真実を含んでいるように思う。

一方で、幼少期に決定された魂の輝きは、成人以降にむしろ花開くのではないかと思い始めている。魂の本質は幼少期に決定される。しかし、その本質の輝きを外側の世界に顕現させていくのは幼少期以降なのではないだろうか。それが成人発達理論の要諦だと思うのだ。

私たちは成人以降、自らの魂の本質をこの世界に具現化させていく。魂の本質が持つ輝きをこの世界に表出していくのは成人期以降のことなのだ。しかも、その輝きはより大きく、より深いものになっていく。それが一生涯を通じた人間発達の本質だと思う。そう思わざるをえない体験が日々積み重なっていく。フローニンゲン:2018/4/13(金)08:22

707. 絵画的・音楽的に生きること

早朝から何やら物音がするので、いつもより早く目が覚めた。物音が聞こえてきたのは、上の階からであった。そういえば、最上階に住むスウェーデン人のアクセルは、九月から五ヶ月間ほどフローニンゲン大学で研究を進めた後に、スウェーデンに戻るということを述べていたのを、眠い目をこすりながら思い出した。それにしても、早朝の五時から、律儀にも掃除機をかけて出て行くとは思ってもみなかった。アクセルがスウェーデンに帰ったことに伴い、改めて人生における出発について考えていた。

昨日偶然ながら、いつかフローニンゲンの街を去る日が来ることに思いを巡らせていたのだ。書斎の窓から見える景色を見ながら、自分がこの街を去る当日の気持ちになっていたのは、幾分気が早いことであり、少しばかり滑稽に思えた。しかし、その日がいつか必ずやってくるということだけは確かなのだ。人間の発達に関する仕事にのめり込めばのめり込むほど、ある側面において日本という国が遠ざかっていき、また別の側面において日本という国が近づいてくるのを感じる。

遠ざかっている側面というのは、単純に私と日本との物理的な距離であり、生活拠点を日本に置く可能性が減少の一途をたどっている、ということである。逆に、近づいてくる側面というのは、日本との精神的な距離であり、それは増加の一途をたどっていると述べていいだろう。日本を離れて自分の仕事に打ち込むことによって、遠ざかるものと近づくものの双方があることに気づく。そのようなことを思いながら、書斎の窓から道行く人を眺めていたのだ。

フローニンゲンの街を去る日までに、私は自分の仕事をどこまで深めることができるのだろうか。そして、自分の内面世界はどのような成熟を遂げていくのであろうか。その日に向けて、今日も自分の仕事を粛々と進めていこうと思う。

アクセルがこの街を去った出来事は、普段と異なる彩りや音色をこの日の朝にもたらしたと言えるだろう。おそらく、日常と少しばかり異なる彩りや音色に気づくこと、そして、それに気づいた瞬間に、それらに少しばかり浸ってみることが大事なかもしれない。何気ない日常の中に潜むこうした何気ない差異を見落とす時、私たちの人生はたちまち単色で塗りつぶされ、単音だけが鳴り響くものに成り果ててしまうことになるだろう。そうした意味において、私は絵画のように、そして音楽のように生きたいと思うのだ。

これは、絵画を鑑賞しながら生きることや、音楽を聴きながら生きることとは異なる。文字通り、絵画のように、そして音楽のように生きることを意味するのだ。毎日の生活の中で触れる全てのものが、様々な色を持つ一つの絵画となり、様々な音を持つ一つの音楽を成すように生きたいと強く思う。そもそも、私たちの感覚が曇りさえしなければ、目の前に広がる世界が常に絵画的であり、音楽的だということに気づくはずではないだろうか。そうした気づきが、もはや気づく必要のないものに至るまで、私は徹底して絵画的・音楽的に生きたいと思う。2017/2/1

708. 最終試験に向けての雑記

いよいよ明日は、「複雑性と人間発達」のコースの最終試験がある。試験に向けて、先週から今日にかけて集中的にコースの振り返りを行っていた。前回の「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの最終試験は、試験時間二時間の中で六問の記述問題に回答することが要求さ

れたが、今回は試験時間が同じであるにもかかわらず、八題の記述問題に回答しなければならぬと聞いている。

前回の試験では、時間に追われ、最後の二つの設問に関しては十分な解答時間がなかったのであるが、今回はなおさら時間に追われる可能性がある。そのため、解答時間に関しては上手く管理をしていく必要があるだろう。

「タレントディベロップメントと創造性の発達」はテキストと論文を試験会場に持ち込むことはできなかったが、今回は持ち込みが可能である。上述のように、試験時間が非常に限られていることを考えると、持ち込んだ文献に目を通しながら解答している余裕などほとんどないと思われる。そのため、試験中に文献を開くことを最低限にとどめるために、今週から今日にかけて、持ち込みが許可されているテキストと論文を繰り返し読んでいた。

それにしても今回の試験は、なかなか予想問題を作成するのが難しかった。「タレントディベロップメントと創造性の発達」のコースにおいては、時間配分だけが予想外であったが、比較的予想問題を作成しやすく、出題されたほとんどの問題が想像していたようなものであった。一応、今回の試験に関して、担当教授のサスキア・クネン先生からサンプル問題が受講者に共有されていたのだが、このサンプル問題と同じような形式が八問出題されるとなると、いよいよ解答が不可能に思えてくる。

そのため、サンプル問題は制限字数が最も多いタイプの問題であり、同様の問題が数問出題され、残りはより字数制限が短いものと想像している。ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス理論や研究手法に関する細かな知識を問うことはない、ということクネン先生から聞いているが、この領域に関する知識基盤を確固とするために、随分と細部にわたって学習を進めていたように思う。

試験前夜と試験当日の朝は、細部の論点から離れ、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの本質に関わる論点を確認しておきたいと思う。このような試験があるおかげで、知識の整理と定着がかなり進んだように思う。この試験がひと段落すれば、今週末からはまた自分の研究に

専念することができるだろう。特に今週の土日を活用して、論文を構成するいくつかの項目——「ダイナミックスキル理論」「変動性」「能力の複雑的階層性」など——を執筆したいと思う。

これらの項目を書き上げることができれば、あとは、リサーチクエストに応じて、今回のコースで習得したいくつかの研究手法を実際に適用していくという楽しみが待っている。現在、かなり多くのリサーチクエストをとりあえず列挙しており、当然ながら、それら全てを今回の研究論文の中に盛り込むことはできない。

今回の研究論文では、一つのリサーチクエストが次のリサーチクエストにつながり、一つの問いが一段深い問いに連なっていくような構造を成すようにしていきたいと思っている。今回の研究で取り上げることができなかった問いについては、今後執筆する査読付き論文用に残しておきたいと思う。一つずつ着実に自分が何かに向かって進んでいるのを今日も実感することができた。明日もまた一つ着実に歩みを進めたいと思う。2017/2/1

709. 大河の一滴を求めて

数日前より、朝の時間をより有意義に過ごしたいと思うようになった。私はこれまでも午前中の時間を非常に大切にしていたのだが、これまでの姿勢をさらに見直し、午前中の時間をより集中的に仕事に充てることができるのではないかと、ふと思ったのだ。

基本的に、起床直後に体を少しばかり動かし、その後、ここ六年間ほぼ毎日行っている英語の音読と筆写を行い、オランダ語の学習を少々行うという習慣が朝の日課となっている。これらの日課を終えてから、昨日の振り返りと一日の開始を促すために日記を一つほど書く。これらの一連の習慣が終わった後から、自分の仕事に取り掛かるという流れになっている。これらの流れに関しては、特に変更を加える必要は全くなく、ただし、朝の時間をより創造的なものにするという意識をより明確に持ちたいと思うのだ。

朝というのは、私にとって不思議なもので、やはり一番集中力が高く、何かに没頭するには最適な時間であるように思う。仮に早朝の六時に起床した場合、午前中の間に随分と密度の濃い仕事を完遂させることができることに気づく。今の私は、より密度の濃い仕事を求めて、朝の時間をより大切にしたいと思うのだ。そのような思いにさせてくれたのは、ゲーテの朝の過ごし方にある。

ゲーテも朝の時間を創造的な活動に最適な時間だとみなしていた。ゲーテが晩年に執筆した『ファウスト第二部』は、毎朝ごくごくわずかの分量で書き続けた文章が積み重なって生まれた作品だということを最近になって知った。朝の時間を貴重なものとみなし、毎朝少しずつ何かを積み上げていくことの大切さをゲーテから教わった気がしたのである。

もう一つ、ゲーテの探究姿勢から得たことは、思想体系にせよ知識体系にせよ、それは日々の小さな積み重ねの中に不可避に伴う様々な感情のうねりの末に獲得されるものだ、ということである。一人の人間が何らかの探究活動に従事する際、そこには必ず様々な渦巻く感情が影に隠れているはずである。

渴望、葛藤、迷い、驚き、失望、感謝、絶望、幸福などのうごめく感情を抱えながら、日々小さなことを積み重ねていくことによって、初めて自分の内側に「体系」と呼ばれるものが構築されるのだと思う。それはまるで、諸々の感情という大河から生まれる一つの雫のように映る。今の私は、この大河の一滴を得るために、日々を大切に生きているのだと思う。それが自分の人生を生きる拠り所のような気がするのだ。2017/2/1

【追記】

ゲーテが晩年に執筆した『ファウスト第二部』の物語に心を打たれるものがあった。ゲーテはあの作品を一夜にして産み出したわけではないのだ。毎朝のほんのわずかの時間を使って、少しずつ文章を紡ぎ出して行った末に生み出されたものなのだ。私も日々、雀の涙ほどの日記を毎日執筆し続けている。そして、毎日わずか一曲だけ作り続けている。いつからそれらの小さな一歩が大きな形になる日は来るだろうか。

朝の習慣に関しては、ここ六年間続けていた英語の音読と筆写をもはやすることはなくなった。それらの習慣を止めたのは、英語に関して自分が次のフェーズに来たと分かったからである。音読と筆写の代わりに習慣になったのは、自らの言葉で簡単に英文日記を綴ることだった。自分の内面の成熟や人生のフェーズに応じて、習慣というのは変わっていくものであり、変えていくべきものなのだと思う。当然、習慣を持つということには変わりはないのだろうが。人生の流れと人生の深まりに応じた習慣を今後も継続していきたいと思う。フローニンゲン:2018/4/13(金)08:49

710. 言語の深化

今朝方、いつものようにオランダ語の学習を行っている、また少しばかり小さな壁を破ったような感覚があった。私は、オランダ語の語彙を積極的に増やそうという意識をそれほど持っていないため、獲得した語彙に関しては未だにそれほど多くないが、オランダ語の音に徐々に慣れ始めていることに気づいたのだ。このようにオランダ語の音への慣れを生み出したのは、毎朝、オランダ語のリスニングとシャドーイングを続けてきたおかげかもしれない。最も入門的なテキストを何度も繰り返しているうちに、ごくわずかずつ聞き取れる音が増え、理解できる内容が増加しているのを感じる。

実際に、昨日も歯医者に行ったのだが、そこで受付の人と患者がオランダ語でやり取りをしている内容の趣旨がだいたい分かったのである。ここから少し考えていたのは、「オランダ語を理解する」ということに関して、ある言語を理解するというのは、どうやら語彙や音の問題だけではない気がしたのだ。というのも、そもそも言語とは常に文化に埋め込まれたものであり、文化的な理解がなければ、真にその言語を理解することは難しい。実際にオランダで生活をするを通じて、知らず知らず、自分の中にオランダの文化が流入していたようなのだ。

オランダ文化が私の内面世界へ流入することによって、オランダ語の理解が進行しているのではないかと思ったのだ。ここから言えるのは、やはりある特定の言語を理解するというのは、語彙や音を学習していてもほとんど意味はない、ということだろう。つまり、ある特定の言語を理解する際に鍵を握るのは、その言語が立脚する文化の奥に徐々に入り込んでいくことであり、語彙と音を文化に根ざされた文脈とセットで理解していくことが重要だと思うのだ。意味というものが常に文脈に織り込まれたものであるため、具体的な文脈の中で語彙や音を理解していくことはとりわけ重要だろう。歯医者の待合室でそのようなことを考えていた。

オランダ語に関して、牛歩の進歩を実感しているのは確かだが、いかんせん日本語に関しては進歩がそれほど感じられない。昨夜就寝前に、書斎の本棚を一瞥したところ、辻邦生先生が二度目のパリ生活を始められた時の日記が収められた書籍に目が止まった。自然とその書籍に手が伸びていき、何気なくその日記のページをめくっていた。確かに、辻先生は小説家として書くことを本業としており、文章に関する修練を長きにわたって続けておられた方である。

だが、そうは言っても、彼が表現する日本語と自分が表現する日本語の間には、これほどまでの溝があるのか、と思わずにはいられなかったのだ。辻先生の文章を読みながら、改めて自分の日本語の未熟さを痛感させられ、それは同時に、自分の内面世界の未熟さを示唆するものであった。日本語で自分の思考・感情・感覚を表現することに関して、単純に日本語の技巧を磨けばいいかというと、全くもってそうではないと思うのだ。それらのものを日本語で納得のいく形で表現していくためには、やはり言葉を生み出す主体そのものの成熟が不可欠だと思う。2017/2/2

711. 眼と意識の発達からの無境界

ここ最近、新しく一つとても小さな楽しみができた。私は毎朝、起床直後に一日分のヨギティーを作っている。そのヨギティーのティーバッグに付いているタグの言葉を、これまでは何気なく読んでいた。何かにはハッとさせられるような言葉もあれば、時にはあまり響かない言葉もある。

ここ最近の楽しみとは、ハッとさせられるような言葉が記されたタグを取り外し、それをノートに貼り付けながら収集するというものである。オランダに来てから、二つの製造元のヨギティーを購入しているが、片方はタグの言葉が英語で記載されており、もう片方はドイツ語——なぜだかオランダ語ではない——と英語で記載されている。

今日は後者の方のお茶を選び、タグに記載されている言葉を見たとき、少しばかりハッとさせられるようなものがあつた。私はドイツ語をほとんど解さないため、タグに記載されている英文にハッとさせられるものがあつたのである。そこに書かれていた英文を直訳すると、「私たちの眼を持ち上げると、そこには境界がない」という意味になるだろう。字面を追うだけでは、この言葉が真に意味することを掴むのは容易ではなかつた。

ティーバッグの入った容器にお湯を注ぎながら、しばらくこの言葉の意味について考えていた。自分の専門知識というのは、良かれ悪しかれ自分の認識世界を強固に形作ってしまうものであり、私は意識の発達理論の観点から、この英文の意味を無意識的に汲み取ろうとしていた。すると、ここで表現されている眼というのは肉体の眼だけを指すのではなく、心の眼、魂の眼(観想の眼)を含めた、世界認識を規定する媒体物のことを指しているのではないかと思つたのだ。

そして、「眼を持ち上げる」というのは、物理的な目を上に向けることだけを指すのではなく、肉体の眼から心の眼へ、心の眼から魂の眼へ、という発達プロセスを表しているのではないかと解釈したのだ。このように解釈することによって、眼を持ち上げると、そこには無境界が広がっているという意味を掴まえることが幾分容易なのではないだろうか。世界認識を規定する私たちの眼が発達していくというのは、意識の発達に他ならず、意識の発達に伴い、私たちの小さな自己はより収縮を続ける。

その先に待っているのが、自己と他の境界が消え果てた無境界の領域なのだ。今日何気なく手に取ったティーバッグのタグの言葉から、そのようなことを考えさせられたのだ。私はそのタグをノートに貼り付け、眼を見開きながら今日という一日を過ごそうと静かに誓った。2017/2/2

【追記】

私は今この瞬間、アムステルダム上空にいる。ワルシャワ行きの飛行機は結局40分遅延となったが、今無事に大空に飛び立った。機内アナウンスがあり、ワルシャワにはあと一時間ほどで到着するそうだ。窓際の席から外を眺めると、そこには成層圏にほど近い、青く美しい広大な世界が広がっていた。真っ白な雲海が地上と上空を隔てている。

この雲海はどこか、地上と上空を隔てる薄い階層のようであり、それを境に世界が一変するように思える。それはまるで、人間の発達段階のようだ。私たちの認識世界というのも、このようにある薄い階層を境目に、突如としてその世界が一変する。それがまさに、発達の非連続的な特性であり、発達の跳躍である。

私たちが普段見上げる空の向こうには、このように広大な青一色の美しい世界が広がっている。そして、この美しい世界のさらに向こう側には広大無辺の宇宙が存在しているのだ。もうそこから先は無境界の世界となる。宇宙とこの成層圏を隔てるものはあつてないようなものであり、成層圏と地上を隔てるものもあつてないようなものだ。私たちの認識がそれらの境目を乗り越えていく鍵となる。私たちにこの成層圏と広大無辺の宇宙が絶えず見えているだろうか。フローニンゲン:2018/4/13(金)
12:06

712. 久々の手書き試験

今日は昼食後、「複雑性と人間発達」のコースの最終試験を受けるために自宅を出発した。今日は随分と気温が高く、二月初旬にもかかわらず、最高気温が10度を超えていた。これまで気温の低い日が続いていたので、このように暖かい日が一日あるだけでも、なんだか心が温まる気がした。そのようなことを思いながら、試験会場のザーニクキャンパスに向けて歩き始めた。

試験会場に早めに到着したので、教室番号を電光掲示板で確認し、その後は外のベンチに座りながら試験内容の最終確認をしていた。最終確認にちょうど目処がたったところでキャンパスにもう一度入り、しばらくすると、試験会場の教室の扉が開いた。扉が開くのと同時に教室に入った時、少しばかり異変を感じた。というのも、前回の「タレントディベロップメントと創造性の発達」の最終試験の時とは異なり、試験会場に一台もコンピューターが設置されていなかったからである。

ちょうど、友人であるエスターが近くを通りかかるのが見えたため、話しかけてみると、今回の試験はコンピューターベースではなく、筆記なのだそうだ。それを聞いた時に初めて、今回の試験が手書きで回答する形式だということを知った。コンピューターであろうと手書きであろうと、自分の中ではそれほど大きな問題ではなかったのだが、文字の出力のしやすさでは、やはりコンピューターの方に軍配が上がるので、コンピューターの方が有り難かったというのが正直な気持ちである。

そのような気持ちを抱えながら、私は指定された自分の席に着いた。席に着くと、試験問題の表紙に、「回答は英語でもオランダ語でもどちらでも良い」ということが記載されていた。オランダ語で回答するという選択肢は最初から私の中にはないのだが、手書きで英語の試験問題に回答することでさえ、よくよく考えてみると、大学入試以来ではないかと思った。

私が米国の大学院に留学する際に受験したTOEFLは、その時からすでに、全ての問題がコンピューターベースであったため、記憶を遡ると、英語の試験問題に手書きで回答するというのは、やはり大学入試以来のことだと思った。あまりの懐かしさに、自然と笑みがこぼれた。

私の論文アドバイザーかつ「複雑性と人間発達」のコースの担当教授でもあるサスキア・クネン先生から、試験開始の合図があった。全部で八問の記述問題を二時間で解答しなければならないのだが、コンピューターベースでさえタイピングが追いつかないと想定していたため、手書きであるがゆ

えになおさら時間配分に気をつけなければならないと思った。初めに全ての問題にざっと目を通し、どれも簡潔な問いでありながら、一筋縄ではいかないような問題だと思った。だが、どれかが突出して難しそうだという印象を受けなかったため、最初から順番に解いていくことにした。

想定内の問題もありながら、やはり想定外の問題もいくつかあった。想定内の問題としては、「発達心理学における伝統的な研究手法とダイナミックシステムアプローチを活用した研究手法の比較」「ダイナミックシステムアプローチを活用した数式モデルの構築方法と数式モデルの利点」「非エルゴード性の特徴、および発達の介入に際する非エルゴード性の重要性」「状態空間分析の特徴と活用方法」「再帰定量化解析の特徴と活用プロセス」などである。

一方、想定外の問題は、「再帰定量化解析の特徴と活用のプロセス」の最後の小問に、「再帰定量化解析をカテゴリーデータに適用する際に、代替次元 (surrogate dimension) を考慮する必要がない理由について述べよ」という問題があり、これは自分の学習範囲を超えている論点であった。

この問の前に置かれた二つの小問から推測しながら、一応解答を記しておいたが、おそらく正しくないだろう。とりわけ、再帰定量化解析 (recurrence quantification analysis: RQA) は非線形ダイナミクスの代表的な手法であり、自分の今後の研究にも適用する予定であるため、この問いについては、また詳しく調べておきたいと思う。とりあえず、今学期の試験を無事に終えることができ、少しばかり安堵感が自分の内側に漂った。2017/2/2

713. 来学期に向けて

昨日、「複雑性と人間発達」のコースの最終試験を終え、ザーニクキャンパスを後にし、試験問題についてあれこれ振り返りを行いながら歩いていた。特に、解答が思うようにいかなかった問題について考えを巡らせていた。それらの問題については、後日改めて自分の知識を確認しておく必要があるだろう。試験会場から自宅に帰るのではなく、社会科学のキャンパスに立ち寄り、来週から始まる来学期の課題論文をプリントアウトしに行くことにした。

一応、明日までが試験週間であるため、キャンパスの図書館には勉強している学生が何人か残っていた。だが、ピーク時に比べれば、その人数はとても少ない印象を私に与えた。来学期は、二つのコースを履修し、一つのコースを聴講する予定である。履修するコースは、「複雑性科学とタレン

トディベロップメント」と「創造性と組織のイノベーション」の二つである。前者は発達心理学のコースであり、後者は産業組織心理学のコースである。社会科学のキャンパスに立ち寄ったのは、「複雑性科学とタレントディベロップメント」というコースの課題論文をプリントアウトするためである。

このコースは、今学期に履修していた「複雑性と人間発達」のコースと同様に、ダイナミックシステムアプローチの観点を中心に据えて、人間の発達に関する理解を深めていくものである。このコースを担当するのはマライン・ヴァン・ダイク教授と、前回のコースでも御世話になったラルフ・コックス教授である。ヴァン・ダイク教授は、以前どこかで紹介したように、ダイナミックシステムアプローチを子供の発達に適用した研究をしていることで有名である。そのため、今回のコースで取り上げる内容は成人の発達というよりも、幼児から青年にかけての発達が中心になっている。

しかしながら、幼児期から青年期にかけての発達は、一生涯に渡る発達に大きな影響を及ぼすという点を踏まえ、依然としてそれらは私の関心事項である。さらには、幼児期から青年期の発達にダイナミックシステムアプローチを適用するプロセスと方法に関しては、成人期の発達にそれを適用する場合と共通するものが多分に含まれている。そのため、このコースの学習内容は、今後の自分の研究と実務に大きな実りをもたらすものだと思う。

また、もう一人のラルフ・コックス教授は物理学者であり、彼の専門である非線形ダイナミクスを今回のコースでもまた理解を深められることが嬉しい。今日の午前中から早速、プリントアウトした論文を順番に読んでいこうと思う。そして、午後からは、フローニンゲン大学の二年目に在籍する予定の「実証的教育学」というプログラムの中で、成人のオンライン学習、特にフローニンゲン大学のMOOCを統括しているジャン・フォルカート・ディエナム教授と面談することになっている。

二年目の研究では、成長支援コーチングの実証研究を進めるか、成人のオンライン学習の研究を引き続き行っていか迷ったところ、今のところ、後者の研究を続けていきたいと思った。ディエナム教授と話す議題は、先日送っていただいた、あるMOOCのコースの評価レポートをもとにして、どのようなテーマの研究を行うことができるかについてである。研究のテーマはこれから詰めていくことになるが、四千人を超す受講者から得られるデータを対象に、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法をどのように適用していくかを考えていく必要があるだろう。ディエナム教授との面談の前に、私の考えを少し整理しておきたい。

ディエナム教授との面談が終われば、とりあえず今学期は無事に終了したことになる。来学期への移行期間は、週末の土日しかなく、結局のところ、それらの休日にも仕事を進めようと思っているので、実質的には今日の夕方から夜にかけてのみ、一息入れたいと思う。2017/2/3

714. フローニンゲン大学へのコンサルティングサービス

昨日に今学期の最終試験を終えたばかりなのだが、今日も早朝から、普段と全く変わらない生活リズムで仕事に取り組んでいた。昨日の最終試験であった「複雑性と人間発達」というコースでは、必読文献以外に、担当講師のラルフ・コックス教授から15本程度の参考論文を紹介してもらい、さらに、最後のクラスで短いレクチャーをしてくれた博士課程のバートからも幾つかの論文を紹介してもらっていた。

それらの論文は全て、以前に一読していたのであるが、一読しただけでは消化不良な箇所が多くあるため、試験が終わってから再度じっくりと読みたいと思っていた。そのため、今朝はそれらの論文に目を通すことを行っていた。

数年前から少しずつダイナミックシステムアプローチに関する学習を進め、今回のコースを履修することによって、幸いにもダイナミックシステムアプローチの言語体系が徐々に自分の内側に馴染み始めたことを実感している。複雑性科学の様々な概念や理論の意味がより深い階層で掴めるようになり、自分が何かの事象を見た際に、それらの概念や理論を組み合わせながら新しい意味を作ることができつつあるように思う。

ただし、今回のコースで本格的に触れることになった非線形ダイナミクスの研究手法については、理解がまだまだ足りていないと実感している。非線形ダイナミクスで登場する数々の手法を理解する前に、その手法を構成する数学的な発想や背景知識についてより理解を深めなければならない。

午前中に読んでいた論文は、まさにそうした私の課題意識と合致するものであり、今朝の文献調査を通じて、また新しい観点を獲得することができた。おそらく、研究者として今後活動をしていくとなると、こうした新たな観点の獲得はもはや避けようのないことなのかもしれない。

当然ながら、観点の獲得はきりが無い試みである。ただし、研究の最中で自分が直面する研究課題を克服していく際に、既存の観点だけでは不十分なことが往々にしてあり、その際に新たな観点が突破口の役割を果たすことは確かなようである。私にとって、数多くの観点や新たな観点を獲得することが重要なのではなく、兎にも角にも、獲得された観点と既存の観点を組み合わせることや、新たな観点が既存の観点を深めてくれるようにしていくことが大切だ。それを肝に銘じておく必要があるだろう。

今日の午後からは、フローニンゲン大学のMOOCを統括するディエナム教授の研究室で面談を行った。具体的には、フローニンゲン大学のMOOCが抱えている課題を聞きながら、自分の研究アイデアを醸成するようなことを趣旨にしたミーティングである。ディエナム教授の研究室に到着し、まずは簡単にお互いの自己紹介をした。ディエナム教授の自己紹介を聞くまで知らなかったのだが、ディエナム教授はオランダ人ではなく、フリジア人だったのだ。

フリジア人については、随分前の日記に書いていたように思うが、現在でもオランダの北西部にフリジア人が住んでいる地域がある。フリジア人はフリジア語という独自の言語を持っており、ディエナム教授曰く、幼稚園からオランダ語と英語を含めて、三ヶ国語を学ぶ教育を受けているそうである。生粋の日本人の私からしてみれば、それらの三ヶ国語を同時に学ぶことは難しいように思える、とディエナム教授に伝えると、それらの言語はどれも似通っており、習得にはさほど苦勞はしない、という返答を受けた。英語という言語体系が徐々に私の日本語の言語体系と近づいてきている状況にあったとしても、オランダ語を習得していくことは依然として私にとって難しいと思いながら、本題に入った。

私はてっきり、こちらの研究アイデアを元にミーティングを行うものだと思っていたのだが、様子が少しばかり違った。本題に移った途端、ディエナム教授から、フローニンゲン大学のMOOCが抱える現在の課題について話があったのだ。ディエナム教授を含め、フローニンゲン大学のMOOCチームが抱える悩み相談を受ける形となり、そこに私の研究を関連づけていく方向になりそうである。話を聞くと、MOOCチームが抱える悩みとしては、大量のデータがあるのだが、どのような観点からどのような手法を用いてそのデータを分析していけば良いのか五里霧中である、とのことであった。

私は思わず、「それは良い知らせですね」という言葉が喉元まで出かかったが、それをぐっとこらえて、ディエナム教授が次から次に述べる課題に耳を傾けていた。確かに、世界中から数千人を超える人たちがフローニンゲン大学のMOOCを受講し、彼らの受講動機は様々なのは間違いない。さらには、MOOCを提供する側の大学も、コースによってその目的を変えているため、問題を一つに絞ることは容易ではない。だが、私から見れば、大量の定性的・定量的データがすでにあることは良い知らせであり、どのような観点からどのような手法を用いてデータを分析していけば良いのかわからないというのも、私にとっては良い知らせであった。

というも、データを分析する観点に関しては、すでに私の中で多くのものがあり、なおかつ、データを分析する手法に関しても、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス的手法などの、既存の統計学の手法では扱うことのできない種類の問いに答えるデータ解析手法をこれまで学習していたからである。

今回、そもそも私がディエナム教授にコンタクトを取ったのは、半年後から始まる二年目のプログラムの中で、フローニンゲン大学のMOOCに関する研究を行いたいという打診をするためであった。ところが、単なる純粋な学術研究ではなく、フローニンゲン大学へのコンサルティングを兼ねた、課題解決型の学術研究になりそうである。

現在の私としては、課題解決型の研究は大変魅力のある話であった。なぜなら、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの研究手法を、学習と人間発達という大きな観点の下、様々な実務領域の課題を解決するために応用させたいという思いがあったからである。

不思議なもので、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを活用したコンサルティングサービスを大学のオンラインコースに対して提供することになるとは思ってもいなかったが、きっとこれも何かの縁であり、何かの導きだろう。2017/2/3

【追記】

この日記で述べている、実務上の課題を解決することを志向した研究を今現在も取り組み続けている。それは主に日本企業との協働プロジェクトの一環として行われているものだ。自分が学術機関で得た知見を、この社会における具体的な課題の解決に向けて活用していくことこそ、自分が強く

望んでいるこの社会への関与のあり方のように思える。学術世界での研究に留まるのではなく、そこで得られた知見を絶えずこの社会の課題の解決に適用すること。その姿勢はこれからも大切に持ち続けたいと思う。フローニンゲン:2018/4/13(金)12:29

715. 新たな場所へ

ここ最近、様々な偶然に見舞われることが多く、今から三日前にも大きな偶然に見舞われた。ちょうど三日前の早朝に、上の階の住人であるスウェーデン人のアクセルが母国に帰国するため、彼が自宅を出発をする音が聞こえた。アクセルがいなくなってから、少しばかりの時間、次に上の階に住むのはどのような人なのだろうかという関心が、私の頭の中を幾分占めていた。

その日の午後、誰かが螺旋階段を登り、上の階の部屋に入っていく音が聞こえたので、新しい居住者が早速引っ越してきたのだとわかった。その時には手が離せない仕事に取り掛かっており、すぐに挨拶に行くことができなかった。仕事がひと段落ついたところで、上の階に引っ越してきた新しい居住者に挨拶に行くことにした。上の階に続く階段を上っていると、何やら日本語が聞こえてきた。

私の上の階に引っ越してきたのは、京都大学から来ている日本人留学生の知人を介して話聞いていた、日本人ピアニストの方だったのだ。この偶然にはとても驚いた。ちょうどその知人も引っ越しの手伝いに来ており、三人でしばらく雑談をしていた。お互いに共通の知人を持っていることもあり、さらに、その知人から色々話を聞いていたこともあったため、その方とは初対面であったにもかかわらず、あまりそのような気はしなかった。昨日は、その方がフローニンゲンに来る前に留学していたフランス時代の話やピアニストに関する全般的な話を教えてもらった。

これまで私にはピアニストの知り合いがいなかったため、その方の話は非常に斬新なものに映った。同時に、現在の私の専門分野である知識発達科学の観点からすると、その方の話は思わず唖ってしまうような面白いものが多々あった。おそらく、これからの日記の中で、その方との対話から得られた新たな着眼点や発想を書き残していくことになると思う。昨日は、ディエナム教授との対話があり、そのピアニストの方との対話があったため、非常に充実した一日だったと思う。

やはり私を新たな方向と深さに向かって開かせてくれるのは他者であることを強く実感する。欧州での生活を始めて以降、日増しに他者の存在を大切に思う自己が確立されつつあるのが分かる。他者の存在を何よりも大切なものとして、日々を過ごしていきたいと強く思う。2017/2/4

716. 連弾による懐古と教示

人生というのは、やはり偶然性と必然性の数珠から構成されているのだとつくづく思う。偶然性や必然性に関する問題は、今の私には手に負えるものではなく、偶然だと思っていたものが、それを超えた視点から眺めてみると必然であったり、必然だと思っていたものが、それを超えた視点から眺めてみると偶然であったりする。

「偶然」「必然」という概念が真に意味するものを、言葉の表層的な意味に囚われることなく、経験を通じて捉え直していくことが大切であるように思う。経験を通じて検証を重ね、経験を通じて意味を捉え直していくという試みを、私の中に存在している全ての日本語の語彙に対して少しずつ行っていくことが、今の私にとっての一つの課題である。そうした試みを課題として認識するのではなく、日々の生活の一部となるまで愚直に継続させていきたいと思う。

以前の日記の中で、今年の四月にオーストリアのザルツブルグの国際学会に参加する話を書き留めていたように思う。また、三日前に、共通の知人を持つ日本人ピアニストの方が私の上の階に引越してきたという偶然についても書き記していたように思う。さらに大きな偶然として、その方の知人のピアニストが現在、ザルツブルグのモーツァルテウム大学で音楽教育を専攻しており、昨日からフローニンゲンに来るという話になった。私の日々の生活の中で、音楽は無くてはならないものであり、書斎にいる早朝から晩までの間中、常に音楽が流れている。

特に、仕事の最中は、何かしらのピアノ曲を絶えず流すようにしているのだ。そうしたことから、ピアニストの方にあれこれと質問をしてみたいことが無数にあり、今回の偶然性はとても有り難いものとして私に降ってきた。また、私の関心事項に「教育」というものが核に横たわっているため、その方が音楽教育を専攻されているという話を聞き、多くのことを聞いてみたいと思った。そうした背景もあり、今日は上の階のピアニストの方が現在通われている、フローニンゲンにあるプリンスクラウス音楽院を案内してもらうことになった。

案内をしてもらったと言うよりも、二人のピアノ演奏を聴かせてもらいに行った、というのが正確だろう。自宅からフローニンゲン駅の方角に30分ほど歩いたところにある音楽院に到着した時、フローニンゲン大学で私と同じプログラムに在籍しているインドネシア人の友人であるタタが研究プロジェクトを行っている音楽院はここのことだったのだ、と初めて知った。

音楽院の中に入ると、そこは私が普段空気を吸っている大学の雰囲気とはまた異なるものがあることに気づいた。私がいる世界とは異なる世界でありながらも、その場所で何かが探究されているというのを伝えるのに十分な雰囲気が漂っていた。そうした雰囲気の余韻を感じながら、私たちはピアノのある空き教室に向かった。教室に到着すると、太陽光が優しく差し込むこじんまりとした空間がそこに広がっていた。

私が今の道を探究し始めてから、せいぜい七年の間しか経っていない。この七年の間において、私は何を生み出し、自分の中で何を磨いてきたのかを問われると、回答に苦しむ自分がある。それぐらい今の私は、自分の専門領域を通じてこの世界に何かを生み出しているという実感もなければ、果たして自分の中で磨かれているものが何か存在するのかわかるところを疑問に思っている。今私の目の前のピアノの前に座っている二人のピアニストは、その道を20年以上も継続して歩いてきたことを考えると、尊敬の念しか湧いてこなかった。

敬意の眼差しを持ちながら、私は教室の片隅の椅子に腰掛けて、二人の演奏が始まるのを待っていた。最初に二人に演奏をしてもらったのは、ドビュッシーの連弾曲である。私にとって、一台のピアノを二人で演奏する「連弾」というのを実際に見たのは初めてであった。楽しさがこちらに伝わってくるような、二人の息の合った演奏を聴きながら、抑えがたい感情が内面の奥底に広がっているのを感じていた。

教室に差し込む柔らかな太陽光に包まれ、二人が奏でる息の合った音色を聴きながら、私は、若くしてこの世を去った親友について思い出さずにはいられなかった。彼と私は小学生の頃、同じサッカーチームに所属しており、ペアでの練習を常に共にしてきた。二人の演奏を聴きながら、彼の思い出の世界の中にいた時、私はふと、なぜ自分が現在、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法を活用しながら、二つの動的なシステムが同調する「シンクロナイゼーション」という現象に取り憑かれているのが分かったのである。

私は本当に、この瞬間まで、彼との幼少時代の原体験が、20年後の今の私の探究の核心部分にあることを知らなかったのだ。これこそが、偶然であり必然であり、人生というものを最も分からなくする類の現象であり、そうでありながらも、私が最も生きていることの神秘さを感じるのだと言っても過言ではない。

私が掴むべきものは、人間の発達に関する知識でも技術でもなく、こうしたものなのだ。これを掴むために、私はあれから20年生きてきたし、フローニンゲンというオランダ北部の小さな街で生活することになったのだと思う。そして、今この瞬間、この音楽院の一つの教室にいるのも、偶然性も必然性も超えた意味があるのだと思わざるをえなかった。

ドビュッシーの連弾後、ザルツブルグのモーツァルテウム大学に在籍しているピアニストの方からショパンの『ノクターン』を演奏してもらい、フローニンゲンのプリンスクラウス音楽院に在籍しているピアニストの方からサンサーンス作リスト編曲ホルヴィッツ編曲の『死の舞踏』を演奏してもらった。それらの曲を聞いている間中ずっと、人生の不透明さと明瞭さと、それらを超越する人生そのものについてただただぼんやりと考えていた。2017/2/4

【追記】

シンクロナイゼーションの探究の背景にはそのようなことがあったのだ、とこの日記を読み返しながら思い出した。若くして自ら命を絶った親友の顔が今でも脳裏に浮かぶ。彼の存在は今の私の中で常に生き続けている。彼と共有した時間と空間、そして何より同じスポーツチームで共に練習したあの日々が起こっていたシンクロナイゼーションの現象が、今の私の強い原体験となっており、それが今の探究を後押ししてくれていることに気づかされる。まさに、この秋から行おうと思っている研究はシンクロナイゼーションに焦点を当てたものになっている。自分の人生が、自らの理解を超えた世界の中で育まれていくことを知る。

機内にアナウンスが鳴り響いた。いよいよワルシャワ・ショパン空港に到着するようだ。この日記が書かれた日に聞かせてもらったショパンのノクターンを思い出す。着陸に向けて準備をしよう。フローニンゲン:2018/4/13(金)12:45

717. 収まらぬ余震

昨日からの余震がいまだに続いている。昨日は猛省に次ぐ猛省を強いられるような一日であり、それを契機に内側で生じた連続的な揺れの波がまだ収まりを見せていない。

昨日、未だ拭い切れない自己欺瞞の数々を乗り越えることができずにいることを猛省していた。特に、自分の頭を用いて自分で考えること、自分の心を用いて自分で感じること等、自律的な主体であれば意図せずとも行われるべき行為を、今の私は未だにそれを意識しなければ、自分の考えではない考えに囚われ、自分の感覚ではない感覚に囚われる。

それらに囚われてはいけないのだ。それらを超えることができなければ、自分の人生を生きることにはならないのだと痛感させられる。自分ではないものに自己を無意識に委ねてしまう時、突如として、生きているというあの確かな情感が色あせていくのである。そのような経験をしたことはないだろうか。

私にとって、自分ではないものとの癒着は、日々の探究生活の中で頻繁に見受けられる。それらは特に、文献を読む際や文章を書く際に顔をのぞかせる。それらをなんとか振り払い、自分の頭と経験を通じて文献を読み、自分の頭と経験を通じて言葉を紡ぎ出すことを忘れてたくはない。自己を通して言葉を読み解き、言葉を紡ぎ出すという一見単純に思えることがいかに難しいことか。

そこからさらに私は、言葉の使い方についてより修練を重ねていかなければならないと痛感している。言葉の使い方は、思考の使い方と密接に結びついており、それは直ちに経験に作用する形で、自分のあり方にもつながってくる。自分の言葉・思考・経験・あり方の総体が、自分の内側で構築される体系に他ならないことを考えると、私が最初に着手すべきことは言葉の使い方にあるように思われたのだ。また、言葉の使い方のみならず、自分の言葉の貧困さについても目を当てなければならない。

言葉の貧困さは、直ちに体験の貧困さを招いてしまうように思う。いや、体験そのものは一つの素材であるがゆえに、言葉の貧困さは体験を掴むことや、それを咀嚼することを貧困にしてしまうように思うのだ。非常に悩ましいことは、言葉を豊かにするためには、体験を言葉で純化していく作業が不可欠でありながらも、それを行うためにはそもそも言葉が豊かでなければならないということである。

この逆説的な事態に気付いた時、言葉が貧困な状態から豊かな状態に移行していくために必要なのは、やはり言葉を生み出す根源的な存在の変容が不可欠なのかもしれないと考えるに至った。

根源的な存在はもしかすると、言葉のみならず、感覚や感情、果ては経験そのものを発露させるようなものかもしれない。それが変容を遂げる時、私の言葉はより成熟したものになっていくのだろう。そうした変容を促していくのは、貧困な言葉を用いながらも自分の言葉をなんとか紡ぎだそうと日々格闘することなのだと思う。2017/2/5

718. 論文執筆と日記について

今日は集中的に論文を書き進めた一日だった。英語で科学論文を執筆する楽しみと日本語で書籍を執筆する楽しみは、執筆過程での思考の働かせ方や言葉の紡ぎ出し方等を含めて、両者には色々違いがある。どちらも自分の言葉を一つ一つ構築していくことは共通しており、それは一つの建築物を建てているかのようである。だが、前者が精密かつ慎重に言葉を積み重ねていく中で、ようやく一つの小さな建築物が出来上がる感覚を伴うのに対し、後者はより自然な流れの中で、大胆に言葉を積み重ねていくことによって、一つの大きな建築物が出来上がる感覚が伴う。

今日は研究論文の中でも、数多くの論文を俯瞰的な視点で眺めながら、情報を一段高い次元でまとめ上げるような作業が要求される箇所の執筆を行っていた。要するに、今日の作業は、既存の発達科学の研究が抱える盲点の中でも最重要なものを取り上げ、それに関する数多くの見解を統合することによって、自分の主張を生み出していくようなことを行っていたのである。それに付随して、論文の中で鍵を握る概念の説明や取り扱う理論の背景を説明する文章を執筆していた。ページ数で言えば、わずか4ページに満たない分量であるが、ほぼ一日中論文と向き合っていたように思う。明日はまた1ページほど論文を書き進めたいと思う。

今朝、起床直後に読み返していた文章は日記について取り上げているものだった。その記事を読み返しながらか、日記が持つ意味について再び考え事をしてきた。私にとって日記というのは、日々の出来事を列挙することでは決してない。自分が日記に付与している意味は、日常の些細な出来事を通じた自己展開の過程を残すというものである。

また、私にとって日記を書くというのは、日々の生活の中で一つでも何かを掴みたいという藁にもすがらうような思いから生まれる行為であり、何かを掴むことを通して生きている実感を掴むための行為でもある。そうした行為を通じて、一人の人間の人生の中における一つの発達現象をつぶさに観察し続けることによって、私という一人の個的な点を突き破り、普遍的な発達原理を掴みたいと思うのだ。

人間発達の本質を司る叡智の果てに届くように、毎日の地上的な出来事を通じて自分が紡ぎ出す言葉をもとに、日々の日記を積み上げていくことが何よりも必要だ。そのようなことを思わせる一日だった。2017/2/5

【追記】

「日記を執筆するというのは、自己展開の過程を残すことである」という自分の言葉に目が止まった。日記を執筆するというのは、単にその日に遭遇した出来事を書き留めるのではなく、そうした何気ない出来事を通じて自分の中で生じる内的感覚や思考の自己展開の過程を記録していくものなのだと改めて気付かされる。日記はそうした過程を記録するだけに留まらず、記録を通じて自己をさらに広く深く展開していく作用を持っている。これまで私は、日記には途轍もない力が秘められていると感じていたが、それはすなわち、自己の存在の内側に途轍もない力が秘められているのと同義であるとふと気づかされた。私たちにはこのように、自己をさらに広く深く押し広げていく展開力が誰にも備わっているのである。ワルシャワ:2018/4/14(土)07:21

719. ベートーヴェン ピアノソナタ第26番『告別』より

一昨日、ベートーヴェンのピアノソナタ第26番『告別』を聴いていると、感涙が静かに目に滲み始めた。ここしばらく、その日の仕事がひと段落すると、欧米の大学院が提供するMOOCを視聴している。現在は、米国フィラデルフィアにあるカーティス音楽院が提供するオンラインコースを趣味の一環として受講している。このコースは、ベートーヴェンのピアノソナタに関する理解を深めていくことを趣旨にしたものである。

このコースを通じて、『告別』という曲の構成的な意味を初めて知った。三つの楽章からなるこの曲は、それぞれの楽章に副題が付けられている。それは順番に、「告別」「不在」「再会」である。実は

以前から、この曲を何度も聴いていたのだが、一昨日はいつもとは違う感覚を得たため、その感覚がもたらされた理由について少しばかり思いを馳せていた。

それは一つに、鑑賞者側の態度が重要であるように思う。これまでの私は、仕事の最中にこの曲が生み出す音を浴びていたにすぎない。しかし、一昨日は、仕事の手を完全に止め、椅子に深く腰掛けながら、この曲と真剣に向き合ってみることにしたのだ。

書斎の窓の外には、完全に日が暮れた闇夜が広がっていた。薄明かりの灯った書斎の中で、そうした外界の闇をぼんやりと眺めながらこの曲にじっくりと耳を傾けていた。すると、感涙を引き起こすような感覚が私に襲いかかってきたのである。芸術全般に言えることかもしれないが、やはり対象と真摯に向き合うという姿勢がなければ、その作品は私たちに何も語りかけてくることはなく、同時に、私たちはその作品から何も汲み取ることができないのではないかと、思わされる出来事であった。

さらにこれは芸術全般を超えて、他の物事にも拡張適用されるような気がしている。私の場合、研究や実務の中で出会う書物や人と真摯に向き合わなければならない、と改めて肝に銘じさせられたのだ。また、感涙を催す感覚がもたらされた二つの目の理由は、単純に楽曲に対する理解の深まりだと思う。つまり、その曲の背景にある知識を獲得することによって、これまで見えなかったものや感じられなかったものを掴まえることができるようになったのだと思う。

私にとって芸術鑑賞が一筋縄ではいかないのは、感覚を磨き、真剣な態度を持っているだけでは、作品からの語りかけに気づけないことが多々あるということである。作品からより深いものを汲み取るためには、自身の感覚を成熟させていき、その作品と真摯に向き合おうとする態度のみならず、その作品を取り巻く知識が不可欠のように思える。

事実、カーティス音楽院が提供するオンラインコースを受講することによって、この曲を構成する三つの楽章に関する知識を少しばかり獲得することができただけでも、随分と視界が開けたような気がしたのだ。知識によって視界が開けたことに呼応して、それはこの曲に対する自分の感覚までも開いてくれたのである。鑑賞者の内面の成熟、態度、知識という三つの要素は、それぞれ独立していながらも相互依存的な関係にある。

これらの三つの要素をそれぞれ深め、それらが相互に影響を与え合った時、一つの作品は非常に多くのことを私たちに語りかけてくれるような気がするのだ。そしてそこから私たちは、生きる実感にも似た情感を作品から享受することができるのではないだろうか。2017/2/6

【追記】

上記の日記で言及されている、自分の芸術作品との向き合い方を眺めてみると、昨日から読み始めた“A Philosophy of Music Education (1970)”の観点に基づけば、いろいろな気づきをもたらされる。ここでは詳細に述べないが、自分がどのような美学思想に基づいて芸術作品と接しているのかが見えてきたのである。この書籍の中では、美学思想の分類がなされており、absolute formalism、absolute expressionism、referentialism、social realismなどの「～主義」と呼ばれる思想区分がいくつか詳細に説明されている。

本書を読みながら、「自分はこの思想区分のこうした考え方をを用いて芸術作品を理解している」という気づきもいくつかあった。興味深いのは、私がいくつかの主義を横断する形の美学思想を自分の中に醸成していることだった。自らがどのように美的体験を捉えているのか、そしてこれからどのように自らの美学思想を涵養していくのかを含め、本書は大変肥やしになる書籍だと思う。ワルシャワ：2018/4/14(土)07:32

720. 底なしの明るさの中で生きることと研究の進展

今日は三週間ぶりにクネン先生とのミーティングがあった。先週は、クネン先生が休暇を取り、スペイン領の島を家族と訪れていたため、ミーティングがなかった。

今朝、先生とのミーティングに向けて自宅を出発した私は、歩いている最中、絶えずこみ上げてくる笑いをこらえることができなかった。というのも、非常に些細なテーマに基づいて知人とテキストメッセージでやり取りをしており、返信のメッセージの草稿を頭の中で考えていると、その内容が自分でも可笑しくなってしまう、笑いをこらえることができなかったのだ。ここからも、やはり自分の根幹には、底知れぬ陽気さが存在していることがわかった。

自分が持っている底知れぬ陽気さについて考えていると、モーツァルトも底なしの明るさを持っていたという話を思い出した。モーツァルトの人生そのものは、苦難の連続であったという話をよく耳にするが、それでも彼は陽気さを忘れることなく日々を形作っていった、ということも耳にしている。そうしたモーツァルトのそばには、絶えず死が存在しており、実際に彼は35歳という若さでこの世を去っている。

モーツァルトに私が惹かれるのはもしかすると、絶えず死の意識の中で、死を超える生の底なしの喜びと明るさを持ちながら日々の仕事に打ち込んでいた姿勢にあるのかもしれない。私もできることなら、モーツァルトのように、湧き上がる抑えがたい喜びと明るさを持って、疾走の中で生を形作りたい。飛び上がるような躍動感の中で、一日一日を、一瞬一瞬を生きるためにはどうすればいいのだろうか。そのようなことを考えながら、私はクネン先生が待つ研究室に向かっていた。

先生の研究室に到着すると、何やら二人の先客がいた。後で先生から話を聞くと、その二人は別の大学の教授であり、既存の大学院プログラムの見直しに関して、クネン先生に助言を求めに来たそうだった。そうした雑談と共に、先生がスペイン領の島を訪れた話を聞き、私の第二弾の書籍の中で先生の仕事について言及した箇所があるという話をした。そのような話題に花が咲いたところで、私たちは本題に移った。

まずは、私が先日執筆した「コーディングシステム」に関する章の添削をもとに、色々と助言をもらった。学術論文を執筆する時の私は、贅肉の削ぎ落とされた簡潔かつ明瞭な文章を執筆していくことを意識しており、選択する語彙に関しても、その文脈に適した最も密度が濃い言葉を用いるようにしている。

しかし、今回の章では少々文章を簡潔なものとしすぎたようであり、抽象性が不必要に高まってしまい、それが明瞭性を濁らせることになってしまったようだった。そのため、この章については、教師学習間の行動分析を行うシステムをどのように構築したのかに関する説明を付け足し、フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用した分析システムを構築したプロセスについて説明を加えていく必要がある。

この点について議論をした後に、先々週から先週にかけて私が適用していた「交差再帰定量化解析(CRQA)」という非線形ダイナミクスの手法に関する実験結果について簡単に報告をした。今回の研究に照らし合わせると、この手法は、教師と学習者の行動に関する二つの時系列データと、スキルレベルに関する二つの時系列データに対して、それらがどれほどシンクロナイゼーションを起こしているのかを解析するものである。

端的に言えば、交差再帰定量化解析を用いれば、二つの時系列データの同調度合いが分かる。これは非常に興味深い手法であり、各回のクラスそれぞれで、シンクロナイゼーションの度合いに違いがあるのかないのかを分析することができる。

教師学習間のシンクロナイゼーションの度合いが高いクラスとそうでないクラスにおいて、何がそれを生み出しているのかを特定することができれば非常に面白いと思っている。交差再帰定量化解析については、クネン先生よりも、以前のコースでお世話になったコックス教授の方が詳しいとのことであり、来週あたりにでもコックス教授に使用するデータの形式や解析結果の解釈についてあれこれ質問をしたいと思う。

そして最後に議論したのは、交差再帰定量化解析以外にも、「状態空間分析」を活用するのはどうかというアイデアである。状態空間分析を用いることは以前も少しばかり考えており、いったんはその考えを保留していたが、今日改めてクネン先生の話を知ると、こちらの分析手法も活用してみようと思った。というのも、状態空間分析を用いれば、教師と学習者という二つのシステムが状態空間の中で、アトラクター状態にあるのかそうでないのかを、どのタイミングでアトラクターから抜け出たのかを含め、二つのシステムのやり取りの推移を観察することができるからだ。

要約すると、二つのシステムのやり取り(行動とスキルレベルの双方)の推移を状態空間内で観察し、そこから交差再帰定量化解析を用いて、二つのシステムのシンクロナイゼーションの度合いを分析することを行いたい。そこからさらに、分析結果をもとに新たな研究につながる理論仮説を構築していきたいと思う。2017/2/6